
俺が戦士で友人が勇者

油性ペン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺が戦士で友人が勇者

【Nコード】

N2803BA

【作者名】

油性ペン

【あらすじ】

ポストに入ってた封筒、それは仮想世界に行くためのチケット。

自分にも友人にも届いたチケット。

クリアするまでは現在生きている世界には「戻れない」

それでも勇者になりたい。ゲームをクリアしたい。

そんな欲求が彼らを仮想世界に導いた

「勇者になりたいですか？」

「自分が勇者になれますか？」

ブローグみたいなもの（前書き）

人が死ぬなどのことがあったりするので、一応R15指定にさせていただきます。

全然R指定じゃないだろ。とか思われるかもしれませんが、そこは大目に見たやつてください…

そしてPCに不慣れな私が始めて作品を書かしてもらいますので欠点など指摘してもらえたら嬉しいです

アドバイスとか応援していただけたら作者は幸せです
なんかコメントとかしていただけたら泣いて喜びます

ブログみたいなもの

成績優秀で容姿端麗な俺が仮想世界で勇者になった
そして俺のおかげでクリアして元の世界に戻れた
…なんてうまい具合にいくわけも無く
面白みの無いくらいの普通な俺

仮想世界に入る…一度は誰もが夢を見るんじゃないだろうか
そしてどうせなら「勇者」になりたいだろう

だが俺には無理だった、まさか親友が勇者だと！？
仮想世界も平凡だと？

俺は神に見放されてるのか？
それとも親友が神に好かれてるのか？

どっちでも良いから少しは俺にも奇跡をを起こさせろ！！

仮想世界往きのチケット

目を開けると見慣れた場所、そう自分の部屋だ
いつもどおり朝起きてポストの確認をした後で学校の準備をして学
校へ行く。

そんな普通の生活。

だが今日は違った、ポストには自分宛の手紙が入っていた
とりあえず部屋に入り読んでみる。

「吉田 雅也様
よしだ まさや

貴方を仮想世界に招待致します
御友人も招待致しましたので
一緒に来ていただけたら
喜ばしい限りです。」

なんだこれは？

もう一枚入ってるので見てみると

「こちらの世界にいる間はそちらの世界の時間が止まります、クリ
アするまではそちらの世界には帰ることが出来ません」

馬鹿らしい、こんな事があるわけ無いだろう。

俺はそう思っていた

学校に行く前にTVでも見るとするか…
ん？こんな事があるのか？

TVに写ってたのは、全身白のスーツで身を包み顔の大半を隠した

人間？

なにに驚いたって？そいつのいつてること。持っているもの。

「この手紙は私が選んだ勇者になるに相応しい者達に送らせてもらった、ただし全員が勇者になれることは残念ながら無い…だが勇者にならなくとも職業は与えられるので心配をするな。一人でもクリアをすれば全員が帰れる、だがクリアするまでは帰れないだからこそ勇者になれなかった者は勇者と共にクリアしてみせよ」

俺が勇者に相応しい？俺にもなれるのか？なりたい！

手紙の裏にはこう書かれていた…

「勇者になりたいですか？」

俺は心の中で思った

俺が勇者になれますか？

~~~~~

「おー雅也おはー」

こうダルそうに話しかけてくるのは親友の遊馬あすま 悠はるか

悠とは話も合うし気も合うし何でも話せる親友だ

さらには顔も良くておまけに頭も良い欠点なんて無いくらいだ

「ん？悠？今日は早起きやん」

「おーブスが変な手紙持ってきて慌てて起こしにきてん」

悠が言うブスとは悠の妹の杏あんのことだ

ちなみに杏は可愛い。というか遊馬家の皆様は美男美女が揃いに揃

ってる。

そして俺の好きな女の子、それが杏なんだ…内緒にしてくれよ？

「悠は杏をブスとか言うけど可愛いと思うで」

「それは無いわ。あっそういうえば、この手紙きた？」

「ん？おお、俺にもきたけど悠どうする？」

「俺はお前任せやわー。んな授業までは寝るから」

ちえっ無責任な…そーか俺任せか…いききたいなあ

杏はどうするかな？なんて考えてたら…

「そっぴや杏がいくつてさ」

うんナイスタイミングだ、心でもよんだか？

まあ良いや。なら俺は杏を守る勇者になろう。それで付き合って…

あかん変なこと考えんところ。

あー授業ダルいなー

## 旅立ち

放課後、皆で俺の家に集合した、集まったメンバーの紹介していいか

俺、この物語の主人公で平凡すぎる人生に退屈してる。得意なことは賭け事で何かを賭けるといつも以上の力が出る

悠、リアルステータスが高すぎる奴。とにかく人に好かれる、男女問わず人気抜群。ゲームが唯一の苦手なこと

杏、悠の妹、兄と同様にリアルステータスが高すぎる。得意なこととは将棋や囲碁等の知略的なゲーム

響、遼、俺と悠の親友で三人でいつもいる。趣味が筋トレで家に行くとしごい量の筋トレ道具を实际使って披露してくる奴。聞いて分かるかと思うがすごくマッチョです…

山本 竜二、俺はあんまり面識が無いが悠と仲が良さらしい…聞いたところによると親が近所の寺の住職らしく一緒に経をよんだりするらしい、だが二重人格らしくキレると物を破壊しまくる良く読めない人

七原 七海、杏の友達。これといって特徴の無い奴…そっぴや悠に惚れてたっけな。

柴野 陸、ヤンキー不良。怖くて話せない人…なぜ来たって？竜二の幼馴染らしい

まあ、こんな面子で集まったわけなんだが纏まりの無さ…この先、大丈夫？

よし、とりあえず仕切ってみるか

「皆チケット持ってる？」

口々に持ってるだの色々と飛び交ってるねーうん

「んじゃ早速いきますか」

そんなときに七海の一声

「で…どうやっていくんです？」

え？ちょっと待て…シラネーヨ

そんな時、杏のチケットを始めに全員のチケットが輝きだしたそれに驚いてると辺り一面が真っ暗に

ピンポンピンポーン

チャイムの合図とともに次は真っ白の空間に

「貴方達が私達と共に戦って下さる方ですね？」

いきなりなんだ？

「では一人ずつ解析させて頂いて職業を授けた後に、この世界で過ごすことについて話させてもらいますね」

そして俺達は色々な場所に飛ばされたんだ

## 旅立ち（後書き）

次で話の内容やら公開します

## この世界とは（前書き）

いよいよか

## この世界とは

あの勝手に話してた人の言う話をしていく

この世界では一人につき二つの職業が授けられるようだ  
職業を授かったら呪文や特技が使えるようになるらしい

呪文や特技は簡単なものは他の職業でも使えるものがあるらしい  
だが高度なものになると個々の職業専用になるとのこと  
そして必殺技：これは一つの職業に一つの技になる

呪文や特技のことをスキルと呼ぶらしい

スキルの発動条件については簡単だ

1つ目は、スキルをイメージする

2つ目は、タイミング

これだけだ。どの職業にどんなスキルがあるかは謎  
つまり人に聞く人を見て盗む本で見る  
これらを駆使してスキルを覚えていく

そしてスキルによつてはアレンジできるものがある  
これは攻撃の順などを入れ替えるものだ  
全ては個々の特徴が出るということだ

あと飯は食わなくても生きていけるみたいだ  
大事なことはHPが無くなれば死ぬということ

死んだ人間は生き返らせてもらうまでは  
現実世界でも死んだこととなるみたいだ  
生き返らせる方法だが、ある職業で蘇生魔法が存在することな  
んだが、色々と大変らしい

HPの回復についてだが

これは宿に泊まるor回復魔法or回復アイテムとなっている

それじゃあ次の章では俺等の職業を教えていくぜ

## 個々の職業（前書き）

職業きましたー

## 個々の職業

俺 戦士 ギャンブラー  
悠 堕天使 アサシン  
杏 ネクロマンサー エレメンタリスト  
遼 勇者 ファイター  
竜二 セージ バーサーカー  
七海 スナイパー シーフ  
陸 ガーディアン ナイト

全員の職業はこうなった。

遼が勇者だと！？

俺も悠も違うなんて

職業の決め方疑うわ。

まあいいクリアしてやんぞ

…さてそれぞれの職業が決まったようですな

色々な所に飛ばされたみたいです

雅也と竜二が森

悠と七海が洞窟

杏と陸が船

そして勇者の遼が墓場

では雅也たちのところから見ていきましょいか

ではゲーム開始です・・・スタート

## 魔獣の森

「どこや此処？」

「雅也さん僕達森に飛ばされたみたいですね」

「おお竜二さん。そうみたいですネ」

「敬語なんかいらないですよ」

「ならついでに竜って呼ばしてもらっわ」

「でわ私も雅とよばさせて頂きますネ」

「よろしく、竜」

「よろしくです、雅」

こうして俺と竜に友情が芽生えた。かも

歩き続けているが景色すら変わってない気がする

「休憩しーひん？」

「そうですね私も少しばかり疲れました」

「んじゃ休憩しよか」

「はい。ですが雅こんな森の中で休憩なんかしても大丈夫でしょうか？」

竜がそう言ったときは既に遅かった

「竜こいつらなんだ？」

「犬みたいですが。そんな柔じゃなさそうですね」

「あっイテエ」

「大丈夫ですかっ！」

「戦わないとアカン見たいやな」  
「そっそうですね」

こうして初めての戦いが幕を開けた  
相手は犬みたいなのが5匹

雅也が剣を振るう  
だが相手には舐もしない  
ちくちく与えられていくダメージ  
これは竜がヒールで回復させる  
雅也は攻撃を与えることが出来ない  
このままでは負ける…そのときだ

竜が暴れ始めた  
ドンッガッバキッイ  
なんともすばやい動きで4匹をふつとばした  
この内の2匹が動かない、竜が倒したんだろう  
だがバーサーカー…自爆ダメージが伴っていく  
竜は立てない位に体力を消耗した模様

雅也は竜を庇いながらの戦いとなる  
もともと攻撃が当たらない  
なのに庇いながらの戦い  
HPが着々と減り始めた

「このままじゃやばいな…」  
そのときだった  
一人の少年が現れた  
「兄ちゃん達よわつちいなあ」  
「は？なんだガキ？」

なんだこの生意気なガキは鬱陶しいな  
「その人のことだけ守つといてねえ」

そして少年は自身よりはるかにでかい棒を自在に振るい見る見るうちに犬みたいなのをなぎ払っていく  
おれは口が開いたまま、ただただ見ていることしか出来なかった  
約10秒後…そこに犬の姿はなく、少年が返り血を浴びたままの姿でこちらに歩いてきた

「そこどいて」  
言われるままにどくと

「これを食べて」  
竜に謎の物体を食べさせる  
「なに食わしてんだよ」  
俺が尋ねる

「この世界での回復アイテムだよ」  
「少年よ。ありがとうございます」  
「いいよ気にしないで、それより僕一人なんだけどさ…一緒にいてくれないかな？」

俺達は命の恩人の言ってることだ聞かなければと二人でアイコンタクトしあった

「好きにしろ」  
「少年のような人が一緒にいてくれると助かります」  
「なら一緒に連れてってくれるの？僕は修也だよ。よろしくね」  
「私は竜二です。よろしくお願いします、こちらが雅也さんです」  
「雅也だ、よろしく」  
「雅さんに竜さんだね。覚えてよ」

「ちなみに二人は初期スキルしか使えないの？」

「ああ」「はい」

「だったらついて来てよ、この先に僕が泊まってる町があるんだけど、そこに図書館があつて各職業の入門書があるんだあ。それみたらスキル覚えれると思うよ」

そうして俺達は修也について行つたんだ

## 魔獣の森（後書き）

難しい、こんな感じでいけるかな？

## アレンティア城下町

町へ向かう道中に竜がこんなことを聞き始めた

「修也君の職業はなんですか？」

「僕は孫悟空と武道家だよ」

「そんな職もあるんですか」

「そそ、兄ちゃん達わ？」

「俺は戦士とギャンブラー」

「私はセージとバーサーカーです」

「なら皆レア職業だね」

「レア職業？」

「知らないか。簡単に言うと珍しい職業ってことだよ。特にギャンブラーはいいね」

「そうなのか？」

「まあ町に言ったらわかるよ」

修也いわく俺達はレア職業持ちらしい

あと城に行くことでクエストを受注できて達成すると報酬が貰えるらしい、報酬は金。たまにアイテムも貰えるクエストがあるみたいで、修也はクエストの帰りだったそうだ

「あれがアレンティア城下町だよ」

「「やっ」とついた」」

「じゃ二人とも最初は図書館行こうか」

修也に案内されて図書館についた

とてつもなく広く全体に本が並んでいる

「はい、どうぞ。これ持ち帰っていいんだよ」  
そういうと本を渡してきた

「じゃ宿いこっか、お金は今日は僕が払うよ」

「いいのか？」

「ありがとうございます」

宿に戻ると修也はクエストの達成報告を出しにいった

俺達は寝る前まで本を読んでいた  
簡単なスキルは覚えやすかったし  
けっこう覚えれた

明日からは三人でクエスト達成させながら  
装備を整えたりと忙しいから寝るか

そういつて三人は深い眠りについた

## アレンティア城下町（後書き）

次は悠と七海の話

## ゲールの洞窟（前書き）

視点がコロコロ変わりますけど悪しからず

## グールの洞窟

\*七海視点\*

どうしよ、悠君と二人だよ…

それにしても悠君ずっと寝てるな

起こしてみよっかな…でも嫌われるの嫌だし、駄目だ…どうしたら  
良いかわかんないよ

「うつうつん。あ？あれ？どうなってるんだ？」

「あつ悠君おはよう…どうしたの？」

うわ…起きちゃったよドキドキ

「七海？ここ何処かわかる？」

「えっあつ私にも分かんないのつごめん…」

「そーか気にするな、分からなくて無理もない」

「あ…うん、ありがと」

\*悠視点\*

こんな暗いところに七海と二人かよ

妹の友達だし緊張してんのばれちゃまずいな  
とにかく俺が守ってやるか…

「どりあえず洞窟とか薄気味悪いし外目指して適当に歩くか」

「そだね、一応スキルで気配消しとくね」

「ああそうだな、俺も消しとくか」

二人は気配を消しもって歩いていくと  
向こうになにやら人影が

「人か？」

「違うと思うよく見てゾンビよ」

「私に任せて」

そついうと七海は銃を構える

バアアアン

銃声と共にゾンビの頭に弾がHIT

「「やった」」

だがゾンビは立ち上がった

「「えっ？」」

今度は悠の攻撃

「フレイム！」

ゾンビは消滅したようだ

どうやら火が弱点みたいだ

ゾンビが居たところが光ってるので  
ふたりは駆け寄った

「なんだろう」

「爪？」

「そうみたいだね」

爪が七海に向かって飛んでいく  
すると七海に体が光り始めた

チャラチャララン

光が消えたと同時に

七海の手に爪が装着された

「なんだろ？ちからが沸いてくる」

二人に微かな声が聞こえる

「それはグールの爪、攻撃力が上がります。けして装備ではありませんよ…加護というものです」

「「加護？」」

「はい。モンスターを倒すことで低確率で加護がつく場合がございます、でわ私は失礼します」

「なんだっただんたろ？ね？」

「説明者みたいな何かかな」

「それより加護なんで私だっただんたろ」

「分からんけど良かったやん」

加護：それがなにかは分からない

だけど七海についた

これで少しは安心かな

\*七海視点\*

なんで私についてちゃうの…嫌われたらどうすんのさ…

とにかく怒ってないみたいだし良かった

二人は敵を倒しながらずっと進んでいく

悠のフレームでゾンビを次々に倒していき

七海の銃で蝙蝠を撃ち落とし

二人の相性が良いのか攻撃の余地を与えなかった

そして光が見えてきた

「町が見えるぞ」

「本当だ…寄ってみよっか」

こうして二人は町に立ち寄ることになった

## ハレムーン町

二人がたどり着いた町はハレムーン町  
女子率80%を誇る女だらけの町だ  
こんなところに悠が来ると…

案の定群がっつきやがった  
だがその女達のおかげで  
色々学んだ事があった

持ってきた本を適当に読み漁りスキルを覚えていった。  
もちろん悠だけだな…

一方で七海はというと  
悠みたいな美少年といるわけだから  
妬まれてバトルを挑まれたらしい

「ちょっと私は戦う気無いつて」  
「「「うるさい」」」

状況は七海VS三人組  
「こんなの勝てないって、誰か助けてよ」

そんな七海の声聞いてか悠が来た  
「おいやめておけ、さもなくば俺がお前らを」「「ごめんなさい」「」  
「  
悠が話し終える前に女達は武器をしまつて跪いた  
「七海にも俺と同じようにもてなせ」

という風に悠のおかげで七海は助かった

この後ホテルに一室<sup>ず</sup>つ借りて  
正確には無料で泊まった

もちろんスキルもしっかり覚えて

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2803ba/>

---

俺が戦士で友人が勇者

2012年1月10日12時49分発行